

アクティブラーニングの組織的推進

杉田 一真*1

Email: SUGITA_Kazuma@hj.sanno.ac.jp

*1: 産業能率大学 経営学部

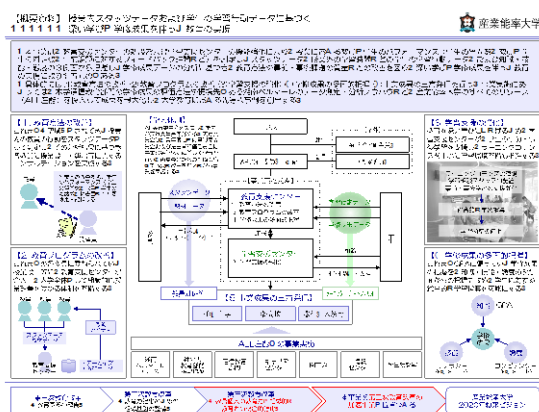
◎Key Words アクティブラーニング, スタッツ, 学修成果の可視化

1. はじめに

産業能率大学は、実学教育を理念に、2020年の将来ビジョンとして「実践的なカリキュラムと学習者中心の教育内容が高い評価を得ていること」を掲げて改革を進め、比較的早い段階からアクティブラーニング(AL)を推進してきた。専任教員のうち90%以上がALを実践し、1年次必修科目「基礎ゼミ」など必修科目を中心にAL化も進み、本学においてALの形式的導入はほぼ完了した。もっとも、ALが学生の深い学びを導くものになっているか、学生の学修成果に結びついているのかなど、さらなる検証が必要な点も残されていた。

そこで、平成26年に大学教育再生加速プログラム(AP)の採択を受けたことを機に、ALの実質化を組織的に推進してきた。アクティブラーニングを深化し、学生に深い学びをもたらすためには、各授業や教員による「個」の取り組みから、教職員一体による「組織」的な取り組みに移行していく必要がある。そこで、APにおいて学長を委員長とするAP実行委員会を組織し、その下部に教職員からなる8つのユニットを設置し、ALの実質化に向けて組織的な取り組みを始めた。本稿では、AP事業を中心に、本学のALの組織的推進の取り組みとその成果、今後の課題について報告する。

図1 大学教育再生加速プログラム(AP)の概要¹⁾



2. 授業改善の取り組み -AL 実質化の推進

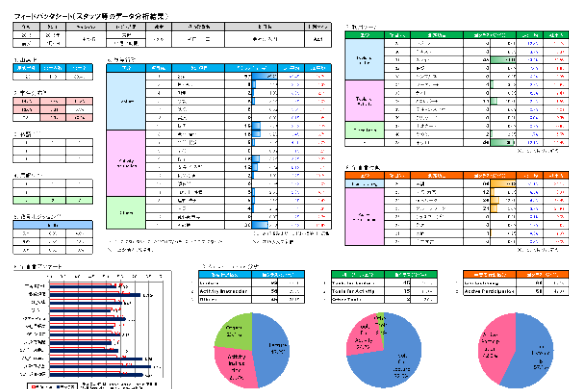
ALの実質化を進める上で最も重視した点は、科目担当者による授業改善をいかに組織的にバックアップし、促進していくかである。以下において、具体的な取り組みとして(1)授業内スタッツデータの測定、(2)学習者行動改善シートの作成、(3)授業改善コンサルテーションの実施、(4)FD研修会における授業研究について報告する。

2.1 授業内スタッツデータの測定

授業評価という「結果データ」のみでは直ちに判断しない授業改善のポイントを明らかにするため、APにおいて「授業内スタッツデータ」の測定を開始した。スタッツデータとは、統計を意味する statistics に由来する言葉(stats)で、スポーツにおける各選手のプレーやチームの成績に関する統計数値のことをいう。授業内スタッツデータの測定・分析・活用により、これまで「教員の聖域」とされてきた授業を客観データにより可視化し、授業改善を加速することが期待できると考えた。具体的には、4つのデータの測定を行った。第一に、授業中の教員の位置を1分毎に記録し、教員の動きを可視化する「ムービングデータ」。第二に、毎分、教員が説明や机間指導などいずれの授業行動をとり、レビューメやスライドなど、どのようなツールを用いているか、学生が質問やグループワークなどいずれの行動をとっているかを記録し、授業における教授行動・学習行動を可視化する「パフォーマンスデータ」。第三に、教室のエリアごと(左前方、中央、右後方など)の学生の「受講態度」。さらに、スタッツデータ測定当日の授業に関する「授業後アンケート」も実施した。

測定した①ムービングデータ ②パフォーマンスデータおよび③エリア別受講態度 ④授業後アンケートの結果は「フィードバックシート」にまとめられ、担当教員に後日提示される。教員は、授業設計とスタッツデータを照合することにより、一方的講義と演習の時間配分の調整の必要性などに気づくことができる。そして、各教員は、学期末の授業評価に加えて、本フィードバックシートをもとに授業改善を試みる。

図2 フィードバックシート



2.2 学習者行動改善シート

本学では、着実に授業改善を推進していくため、授業改善プロセスの可視化にも取り組むことにした。授業内スタッツの測定対象となった科目の担当教員は、測定前に「学習者行動改善シート」のPlan欄を記入する。Plan欄には、測定対象となる授業回のねらい、当該授業計画に含まれる学習者の興味を喚起する工夫や学習者の理解を促し、知識定着を促進する工夫などを記入する。測定後は、測定結果を踏まえて学習者行動改善シートのCheck欄に、出席率や私語・居眠りの状況、授業後アンケートの結果などに関する自己評価を記入する。評価は、A.期待を上回っている、B.期待通り、C.期待を下回っているの3段階で行う。そして、特にC.期待を下回っている項目について改善を図るため、Action欄に授業および学習者行動の改善アイデアを記述する。

図3 学習者行動改善シート ii

The figure displays a 'Student Action Improvement Sheet' (学習者行動改善シート) with several sections:

- Plan (Plan欄):** A table for recording lesson objectives, learning interests, and understanding-promoting techniques.
- Check (Check欄):** A table for self-evaluation of attendance, private conversations, and sleep during the lesson.
- Action (Action欄):** A section for describing improvement ideas for the lesson and student behavior.

本学では教職員全員に MBO (Management by objectives, 目標管理) を導入しており、専任教員は年2回学部長との面談の上、目標の設定および成果の検証、改善策の検討を行っている。そして、授業内スタッツデータの分析結果を記した「フィードバックシート」および「学習者行動改善シート」は学部長面談の資料となり、学部長は本資料をもとに各専任教員に対して授業プログラムや授業運営に関するコンサルテーションを実施する。

2.3 FD 研修会における授業研究の実施

各教員が学習者行動改善シートに記載した授業改善アイデア (Action) はナレッジとして蓄積され、FD 研修会などを通じて共有される。これにより、教員「個人」のアイデアを超えた授業改善が期待できる。

また、授業内スタッツデータを分析して「特色ある

授業」を抽出し、それを題材にFD 研修会を開催し、授業プログラムの工夫や授業進行のポイント等を共有する授業研究を行っている。授業内スタッツデータの測定とともに一部の授業においては授業撮影もしており、撮影した映像を視聴しながら、担当教員が授業進行において留意している点などを解説するFD 研修会は、授業改善に関する具体的な方策を知ることができると、参加者から高い評価を得ている。

2.4 スタッツデータ蓄積による発見

2年間にわたる授業内スタッツデータの蓄積により、これまでいくつか興味深い発見があった。

第一に、同一科目を複数クラスで開講している授業を分析した結果、深い学びを導く授業は、教員やクラス特性によって一様でないことが確認できた。たとえば、同一科目だが授業スタイルが全く異なる2クラス (レクチャー中心と双方向講義中心) が、ともに学生が集中して授業に臨み、理解度が高く、高い授業評価を得ているケースがあった。授業内スタッツデータの測定を開始した当初は、正直「モデル授業」の抽出も可能ではないかと考えていた。しかし、測定・分析を進めてみたところ、同一の授業内容、到達目標であっても、教員やクラスの特性に応じて適切な授業スタイルを選択することの重要性が改めて示される結果となった。

第二に、授業スタイル (たとえば知識修得を主な目的としたレクチャー中心の授業) が類似し、スタッツデータに大きな違いはない授業であっても、学生の受講態度や授業後アンケートの結果に大きな差が生じるケースがあることがわかった。差が生じる原因の1つは、授業プログラム、特に学生に対する問いかけや演習の課題内容にあることがわかった。授業中にいくらか熱心にレクチャーを行っても、授業設計上、学生の能動的学習態度を引き出す適切な問いや課題を準備しておかなければ、深い学びを導くアクティブラーニングは実現できないことが改めて確認できた。

3. 授業外学習行動の可視化

3.1 授業外学習 20%評価ルール

2015年度より成績評価において、授業外学習に対する評価割合を全体の20%以上にしなければいけないルールが設けられた。これにより、授業内外を一体としてどのように学習プログラムを設計するか、授業外学習の成果をどのように評価し、成績に反映させるかに関して議論と知見が一気に高まった。

3.2 TRW 調査の実施

2016年度、学生の授業外での学習行動を可視化するために、全専任教員が各学期1科目の対象科目を選定して、授業外における学習時間 (Time) ・リーディング量 (Reading) ・ライティング量 (Writing) の調査を行った (以下、TRW 調査)。具体的には、学生に毎週、授業外において何時間学習し、文献等を読み、レポート等を執筆したかを LMS (Learning Management System, 学習管理システム) 上に入力してもらった。調査結果は、学期末に担当教員に示され、教員は授業設計時に想定した

表5 主体的学習態度を導く重層的プログラム

実施時期	プログラム
入学前	キャリア開発セミナー
入学後	オリエンテーションキャンプ
初年次	基礎ゼミ (PBL)
2年次	2年次ゼミ (IBL)
全学年	キャリア科目の設置

また、2016年度には、高大接続事業の一環として、本学がこれまで初年次教育等で培ってきた学生の主体的学習態度を導くプログラム開発・運営ノウハウを活用し、「高校生向け主体的学習者育成プログラム」を開発した。2017年度には文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、課題研究に取り組む高校などに、本プログラムの提供することになっている。本プログラムを通じて、人材育成における高大連携をさらに強化していきたいと考えている。

8. おわりに

本学では、ALの組織的推進に取り組む過程で、教授行動および学習行動というプロセスの可視化の必要性を認識し、授業内スタッフデータの測定やTRW調査を実施することになった。また、学生の学習行動改善に取り組む中で、改めて学習指導の基盤的な重要性を認識することとなった。今後も、プロセスと結果(成果)の両面の可視化に取り組みつつ、学生の学習行動変容、学修成果の向上に向けて組織的取り組みを加速していく。

図6 プロセスと結果(成果)の可視化

教授行動 の可視化	学習行動 の可視化	学修成果 の可視化
・授業内スタッフデータ ・授業外学習内容 の詳述(シラバス)	・TRW調査 ・授業出席状況 ・課題提出状況 ・LMS利用状況 ・学生生活アンケート	・GPA ・PROG ・卒業生調査

取り組みははまだ道半ばであるが、学生の授業外学習時間が伸長するなど、徐々に成果も現れてきている。また、大学教育学会における課題研究の一環として本学経営学部「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」の学習効果等について調査・分析を行っていただいた結果、基礎ゼミⅠ・Ⅱの授業によって深い学びが増え、浅い学びが減少していることが明らかになった。さらに、大学通信「入学後、生徒を伸ばしてくれる大学」ランキングで10位(昨年17位)に入るなど、外部から評価いただくことも増え、改革の原動力となっている。

もっとも、各科目の授業改善が進めるだけでは、学生の学修成果を最大限に高めることはできない。カリキュラム全体の統合的效果として学生に深い学びを提供し、高い学修成果を導くこと、すなわちカリキュラムマネジメントが不可欠である。さらに、いくら緻密に設計されたカリキュラムであっても、それを実効性

あるものにするためには、科目間で連携が不可欠である。今後さらに改革を加速し、適切なカリキュラムマネジメントのもとに、科目間連携、各科目の授業改善が行われる体制を整備していく必要がある。

参考文献

- (1) 杉田一真「産業能率大学の事例」IDE-現代の高等教育『学修成果の可視化』Vol.590, 2017年5月号
- (2) 森朋子「データで見る基礎ゼミの効果」産業能率大学FD研修会, 2017年1月20日開催
- (3) 杉田一真「産業能率大学の取り組み」産業能率大学第2回公開FD研修会「主体的学習者とアクティブラーニング」2017年2月10日開催
- (4) 大学教育学会第39回大会 ラウンドテーブル4「アクティブラーニングの組織的導入の意義とその効果」2017年6月10日, 広島大学

ⅰ 本学APの取り組みについては、下記特設サイトを参照ください。

<http://www.sanno.ac.jp/univ/ap/index.html>

ⅱ 教員行動が変わっても学生の学習行動が変わらなければ、学修成果の向上にはつながらないという考えのもと、授業改善を促すシート名を「学習者行動改善シート」とした。

ⅲ 科目の担当責任者。授業内容および授業運営に責任をもち、同一科目で複数のクラスが設置されている場合は、科目担当者間の連携・情報共有を図る役割も担う。

ⅳ Progress Report on Generic Skillsの略。学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発した、大学卒業生として社会で求められる汎用的な能力・志向・態度(Generic Skills)を評価するテスト。本学では1,2,3年次に受検を義務付け、卒業生の一部にも受検してもらっている。